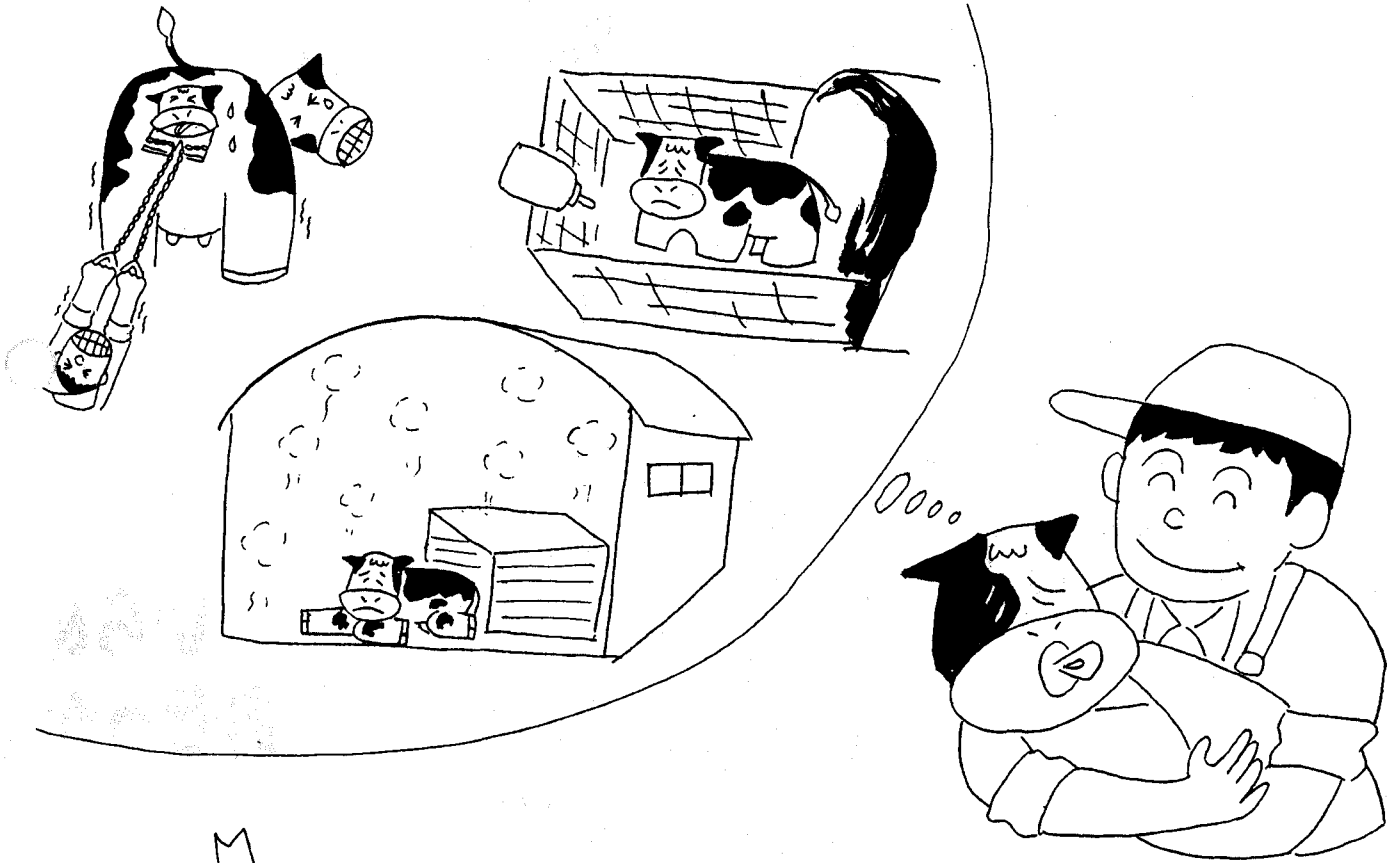


Ⅳ. いらぬおせっかい

牛の身になって考えれば
『?』と思うことが結構あるものです



分娩は
監視すれども
関与せず

おせっかい
主はちっとも
気が付かず

ちよっと待て
やたらに足を
引っぱるな

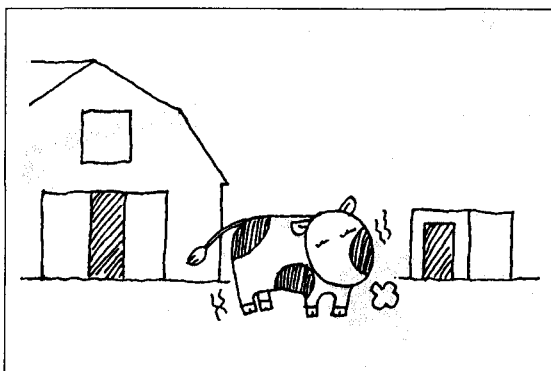
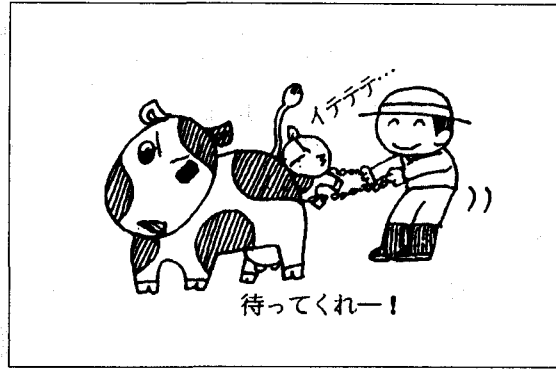
いつまでも
いらぬミルクで
肥満症

(1) <分娩時の介助>

『分娩は監視すれども関与せず』が理想です。

ところがアンケート結果によると根室管内の約40%の人は、分娩時の介助をほとんど全ての牛に対して行なうと答えています。

母牛、仔牛にとっても自然に近い状態での分娩が理想です。乾乳牛や分娩牛の飼養環境に留意しながら、なるべくストレスを与えないよう、分娩させてあげたいものです。



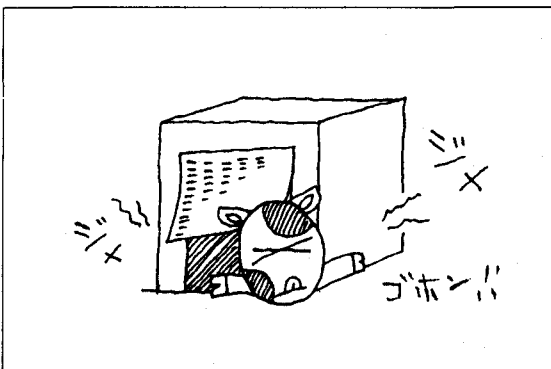
(2) <暖かい場所から寒い場所へ急に移動させられた>

冬の寒い日に生まれた仔牛を、すぐにカーフハッチへ入るのはかわいそうと、その日は窓も閉め切っている暖かく、じめじめした牛舎内に入れておいた。

次の日は氷点下の気温だったが、体も乾いただろうと、カーフハッチへ移動した。ところが温度差のショックで風邪を引き下痢がなかなかおさまらない。

いらぬ
おせっかい

コー



(3) <換気不足と光不足>

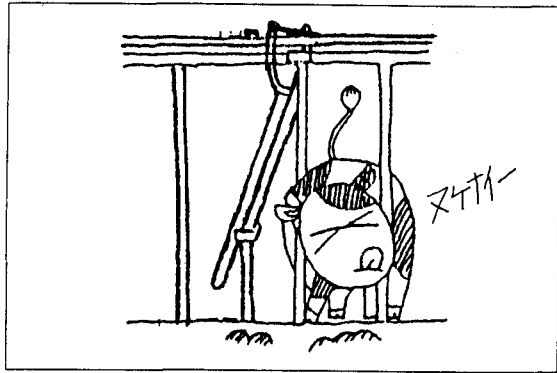
例えば、古い親牛舎の窓も閉め切ったような薄暗い場所にとじこめたり、カーフハッチの入り口にムシロを掛けて中が暗くなったり、換気不足になったりしてはいませんか。日光が当たらないと、殺菌効果も少なくなり、ウイルス細菌感染の危険性が高くなります。常に新鮮な空気と日光が当たるような環境を確保してあげたいものです。

(4) <長期哺乳とダラダラ離乳>

最近では“早期離乳”がかなり定着してきているようですが、アンケート結果ではまだ約40%以上の方が60日以上哺乳しています。

一定量以上の哺乳は離乳を遅くさせることとなります。また長期間の哺乳は下痢をさせる機会が多くなりますので作業の効率化を図る上でも可能な限り早く離乳したいものです。





(5) <サイズが合わない施設>

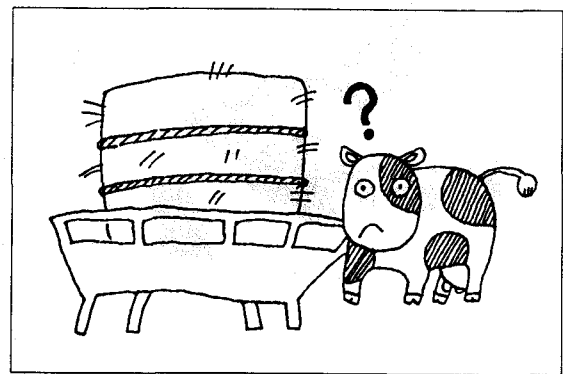
まだ小さ過ぎる牛を育成舎に入れておいたら本来、狭くて牛の首が入らないはずの所に首を突っ込んでしまい、抜けなくなって苦しんでいた。

グループ分けの際には牛のサイズ、月齢等に注意します。特に牛同志が“社会的に安定”した状態でゆっくりと生活できるように配慮してやる事が重要です。

(6) <トワインがかかったままのロールサイレージ>

ただでさえ、きつく縛られたロールサイレージを食べる事は育成牛にとって大変な事です。

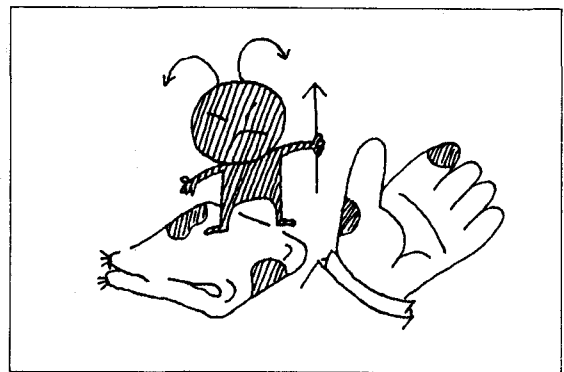
あわてて作業をしたばかりに、トワインを取り忘れたまま草架台にロールを入れられて食べたい量を腹一杯食べられずになります。給与作業はあせらずに！



(7) <雑菌だらけの指や器具>

分娩の介助や哺乳に使う器具の洗浄・保管や使用前の殺菌等は、ほとんど無頓着になっていませんか？

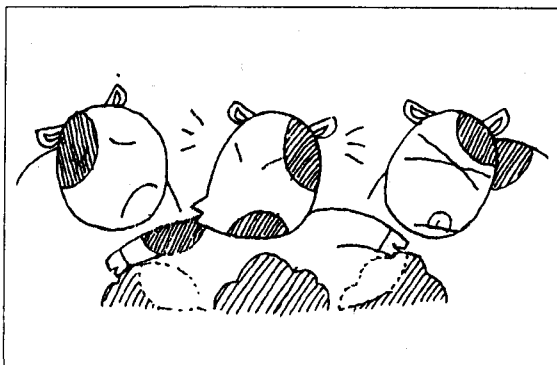
分娩介助の際には手指を消毒し器具等の殺菌にも心がけましょう。



(8) <横取りしたエサで太り過ぎてしまう育成牛>

1頭に1kgずつ配ったつもり的配合だったが、強い牛が2頭分ピンハネして食べてしまった。

この牛は、いつも食べ過ぎていて太り過ぎてしまった。弱い牛の方は成長が遅れて、種付け時期が遅くなった。均等に配合等を給与するには、飼槽の工夫、連動スタンションの利用、粗飼料に混ぜて食べさせるなどの工夫が必要です。



もっと
気付いて
くれれば
いいのに
ナー